

文協統合フォーラム

主催者:ブラジル日本文化福祉協会

事業日(期間):10月8日～9日

事業場所:文協

事業要約:

10月8～9日、今年で8回目となる文協統合フォーラムが開催され、サンパウロ州内外の次世代日系団体所属者を中心に約120名が出席し、中前総領事が基調講演を行いました。今年は「可能性をパフォーマンスに変革する」というテーマの下、特にSNSを使った効果的な対外発信のあり方について議論が行われました。



(写真: Jiro Mochizuki)

中前総領事の式典でのスピーチ

今日再びここで講演する機会を与えていただいたことに感謝します。

サンパウロに総領事として赴任して 16 ヶ月になりますが、この間の経験はこれまでの外交官生活の中でも最も豊かで充実したものでありました。日系社会の皆さんには、このような経験を与えて頂いたことに心より感謝しています。

これから述べることは、これまでの勤務経験から自分が思ってきたことです。あくまで個人の見解であり、私が属する組織である日本国外務省の公式の見解とは必ずしも一致しないことをご了解願います。

1. 昨年の講演で二つの観察を述べました。一つは、いわゆる日系社会の規模について、それが血統上日本人の血を引く人の正確な数自体を把握することが重要なのではなく、日系の自覚と体现の意思を有する人々に着目すべき時代がやってくるのではないかという予感。二つ目に、ブラジルにおける日系社会の存在感の大きさについての驚きとこの受け止め方についての課題。その後、およそ 1 年にわたる執務で、これらのことを確認する多くの機会を得ました。

2. まず、ブラジルにおける日系社会の地位について述べます。リオデジャネイロ・オリンピック開会式のプレゼンテーションでは、ブラジルの歴史における日本人移民が堂々と提示されたことに驚かされました。ブラジルにおいて日系社会は人口の 1%に満たない民族グループであることを想起したいと思います。これをプロデューサーであるフェルナンド・メイレスの個人的な思想や嗜好の表現に過ぎないと割り切ることは出来ないでしょう。なぜなら、このプレゼンテーションは世界 30 億人にテレビ中継され、国内外で圧倒的に高い評価を得たからです。式典で表現された日本人移民の歴史と日本の国に対する認識は、ほぼブラジル国民のコンセンサスとみてよいと考えます。

3. もう少し例をご紹介します。これまでサンパウロ州内陸や他の地域の日本人移住地を訪問し、慰霊祭や入植記念日などの諸式典に出席しましたが、私にとっては驚きと感動の発見の連続でありました。非日系人の市長が仏式の法要で手を合わせ、式典では、我々は日本人に道義と文化を教えてもらったのだと、テレビカメラやラジオのマイクの前で演説しています。最近改装されたリンスの歴史博物館の壁画は、その半分以上が日本人移民の歴史と文化を描いたものです。本来日本では盆踊りは 8 月中旬に行われる行事ですが、当地では盆踊りが 4 月から 12 月まで各地で行われています。各々の町の市制記念日行事の一部として盆踊りを開催するのだそうです。つまり、盆踊りは日系人の内輪のお祭りではなく、町全体が祝う周年行事の一部になっているのです。コスプレイヤーや祭りダンスのグループもその重要な参加者です。若い世代の方々には、いま一度このような地方で起こっていることを体験することをお勧めします。週末の余暇として楽しいかつまらないかを確かめて欲しいではありません。ブラジルの社会による日系人文化の受容と同化が見られます。これらの儀式は日系人のノスタルジー共有の場ではなく、ブラジル世論に日系人の歴史と文化の持つ重要性を毎年再確認させる機会になっているのです。ブラジル日系社会が今日享受する地位は、先達への敬意を意識し表現することなくして維持され得ないと思います。

4. 次に日系人の範囲と自己意識の関係について述べます。日本の外務省は毎年、日系人の希望者から選抜を行い日本での研修に招聘しています。昨年からのその招聘の人数とカテゴリーが拡充され、その一部は一般公募によって選抜することとなりました。正直なところ当初は応募者の数と資質に確信がありませんでした。しかし実際には、毎回 2 名程度の募集枠に対し 200 名以上もの応募がありました。これから 20 名あまりを選び面接を行いました。いずれもブラジルの社会人として有能であるだけでなく、日本人の子孫であることの自負と誇りを強く意識する、大変立派な日系人でありました。招聘の最終選考が困難を極めたことは

言うまでもありません。また、残念ながら招聘出来なかった人達の中にも、この機会をきっかけに総領事館の友人として緊密な連携をコミットしてくれる人たちが何人も現れました。

5. 連携の対象とすべき日系人のホライズンが拡がりつつあります。ブラジル日本人移住者はおよそ24万5千人、現在の日系人の数は約190万人と推計しています。そのうち今日のコロナ社会の一員と意識する人は10万人から20万人とみられていますので、コロナ社会の外に170万人を超える日系人が存在していることになります。これらの人々に対しては「ブラジル社会への同化が進み、日本人としてのアイデンティティを失いつつある」といった評価が聞かれます。しかし、日本人移民の子孫がこの国に同化し、立派なブラジル人として活躍していることこそが、ブラジルの日系人に対する評価の重要な要因であることを忘れてはならないでしょう。オリンピック開会式のテレビ中継で、アナウンサーが、日系人は現在第5世代に至り、今日完全にブラジル社会に同化している、と誇らしそうに繰り返しコメントしていることが私には印象的でした。また、日頃コロナと接触が無くても日本人の子孫として強烈な自覚を持つ人が大勢いることは、先程述べたとおりです。

6. もう一点述べます。近年、新しい移民が生じています。いわゆる「デカセギ帰り」と言われる人々と、その子供達です。少なくとも15万人がブラジルに帰国していると見られます。この人達は現代の日本を知り、日本語の継承において重要な立場にある人々です。デカセギ子女は多感な時期を日本で過ごし、帰国後、伯社会への同化に苦労している者も少なくありません。デカセギに行った人達とブラジルに残った日系人との間には、複雑で微妙な感情が存在するとのお話を様々なところで伺いました。しかしその子供達に責任はありません。また次世代の日系人に、日本での経験や自らのアイデンティティをネガティブに捉えるような人達が増えることは、ブラジル日系社会全体の発展にとって決して好ましいことではないと思います。幸い、私が知己を得たデカセギ子女は、いずれも素晴らしい人達でした。これからも出来るだけ多くのデカセギ子女には、日本の素晴らしい思い出とブラジル人としての誇りをもって成人してほしいと思います。ここにも日系社会のホライズン拡大が見られます。

7. このような現在の日系社会と日本の関係を考える中で、両者の関係にパラダイムシフトが生じつつあると思っています。かつては日本人移民とその家族が日本政府の支援を必要としていました。今日、日本が、その国際的地位の確保やブラジルとの関係発展のために日系社会との協調を必要としているのです。また、従来日本政府の日系人支援策は、移住者の定着と生活向上の支援ということで説明が可能でありました。そのことが、これまで日本の支援策が3世までを対象にしてきたことの根拠になっています。今後、4世より若い世代が日系社会の次の担い手になってきます。これとの連携、協力を行うためには、移住者支援とは異なる、新しいロジックが必要となります。ブラジル国民である日系の人々と新しい連携関係を実施するために日本の予算を使うことを可能にする、新しいモデルの構築が必要になるでしょう。これは、今後日本で議論されねばならない論点です。

8. また、日系社会の中で世代間の連携の重要性が指摘されています。ブラジル日系社会の有形無形の資産は日系人の先達がこれまで営々と築き上げてきたものを引き継ぐわけですから、大変重要な課題です。これに関連して、一部の日系社会の活動が重要な変質を遂げているように見られることを指摘したいと思います。例えば、多くの日系団体会館で実施されている日本語教室では、今日、生徒の大半が非日系の人たちになっています。カワイイ文化のお祭りであるミミパーティーは、サンパウロ市内の北海道会館で開催され、多くの非日系の愛好者が集合しました。ニッポンカントリークラブで若者が中心となって開催するニッポン・トークは、千人近くの聴衆を集めるサンパウロ有数の啓発イベントになっています。例えばマリリアやクイアバの日系人は、現地の低所得者層の子供を会館の野球チームに参加させ、情操教育に貢献しています。インテル会館福祉集団の若者は、養護施設や医療施設の支援を目的とした様々な活動を行っています。サンパウロ日本援護協会の菊池会長のお話を伺う度に、援協が日系人の互助組織から、ブラジルの医療と福祉事業をリードする模範組織になってきていることを実感させられます。サンパウロのフェスティバル・ド・ジャパンは、もはや日

系人の文化祭ではなく、20 万人のサンパウロ市民が日系人のスピリッツを体験するために訪れるテーマパークです。以上 要するに、今日、日系人による社会活動の多くは、「お互いの助け合いからブラジル社会での リーダーシップ発揮へ」と、その動機が変容しつつあります。コロンビア社会における世代継承 の成否は、そのような視点も伴になるのではないかと推察します。

9. ここで少し話題を変えて、ジャパンハウスについてお話ししたいと思います。これまで述べてきたことと強い関連性を持ち得るテーマであると思うからです。今日、国際社会で情報量の増大や伝達手段が多様化しています。ジャパンハウスは、そのような環境の中で日本の発信力を高めるための施設です。これまで日本への関心が高くなかった人々を含む幅広い人々に対し て日本の「正しい今日の姿」の浸透を図っていきます。また、日本ブランドや地方コミュニティ の魅力の発信を通じて、親日派・知日派の裾野を一層拡大させていくものです。したがって、定義上ジャパンハウスは日系社会を支援することを目的とする機関ではないことは留意する必要 があります。また現地の団体が行うイベントや文化行事に場所を提供することを主目的とする 施設でもありません。

10. それでは、ジャパンハウスと日系社会との関係のあり方をどう考えるのか、という課題が出てきます。これについては、最初から用意された答えはありません。おそらく、ジャパンハウスは、これまでのものとは相当違った体験を提案することになるでしょう。皆さんが日本を訪問する度に経験されるような、「現在の日本」の文化、技術、社会を発信していくことが目標です。サンパウロには、ロンドン、ロサンゼルスと並び世界で初めてジャパンハウスが設立 されますが、これはサンパウロが南米における経済・文化の中心であること、国外最大の日系 社会がサンパウロにあることがその理由です。祖先のふるさとの国が今日このように魅力的な 国になっている、ということを伝えることで、日系人の誇りとプレステージが一層高まることに寄与できるものと期待しています。来年 3 月に予定された開館の後、2~3 度の展示やイベントで効果が出るとは思われません。10 年、20 年の取り組みになるでしょう。しかし、表現の 方法は異なるものの、日本人のスピリッツの表現であることに変わりはありません。ジャパンハウスが提示するものとリベルダーヂや各地の日系人会館での体験が、表現の方法は大きく異なるが実はその本質が共通していることを、ブラジル人はいつか気が付くに違いないと思っています。日系社会との連携のヒントはそういうところにあるのかもしれませんが。まずは結論を 焦らず、ジャパンハウスを見て、知って、ともに考えることを呼びかけたいと思います。そのた めにも、ジャパンハウスと日系社会とのコミュニケーションが大変重要です。皆さんと情報や 意見を交換するために、私はジャパンハウスのアンジェラ平田事務局長とともに、いつでもお 伺いするつもりです。

11. 講演を締めくくるにあたり、文協統合フォーラム(FIB)は、様々な世代やバックグラウンドのブラジル日系人が、共にその魂を探る目的を持った、崇高でチャレンジングな企画であると思っています。関係者の方々に心より敬意を表します。また、この企画の成果を、ぜひ広く発信されることを期待します。ブラジル国内外の多くの日系人が、この企画の成果から有益な示 唆を得るのではないかと思います。フォーラムの成功をお祈りします。